

（10-4）熊本地震 応援給水の教訓と対策

○福永 修三（鹿児島市水道局） 西元 和昭（鹿児島市水道局）
造免 祥太（鹿児島市水道局） 園田 淳（鹿児島市水道局）
岡元 光平（鹿児島市水道局）

1. はじめに

4 月 14 日 21 時 26 分ごろ、熊本県に隣接する鹿児島県でも震度 4、鹿児島市でも震度 3 を観測した。翌 15 日 13 時、熊本市へ向け応急給水隊（第 1 班）が出発、熊本市に到着したのは午後 7 時前、その後、応援給水活動を終え宿舎に戻った。直後、16 日午前 1 時 25 分に本震を熊本市内で体験した。ここに熊本地震の応援給水活動で得た教訓と対策を報告する。

2. 教訓と対策

① 事前の準備

迅速に派遣するため、事前に隊員、物資を定める必要がある。緊急時には、隊員の意思疎通が重要であり、日ごろからのコミュニケーションが必要となる。東日本大震災時の宮城県への応援給水活動の経験から事前に体制を編成することが求められていたが出来ていなかった。今回の地震への対応を踏まえ、平成 29 年度はじめに、応援派遣隊（第 1 班）が編成された。

② 配布水量制限

本震直後、濁度上昇による浄水不足及び給水車不足により、給水車への補水体制が整うまで、独自の判断で一人あたり給水袋 1 袋までとした。その後、補水体制が整ったので、持込容器に合わせて給水した。被災者のなかには、他の小学校では給水制限をしているため、こちらの小学校に来たという方がいた。応急給水拠点ごとに給水量が異なることは被災者に対し混乱を招く可能性があるため、配布水量の確認が必要となる。

③ 給水袋の再利用依頼

3 日目以降、給水袋が不足し始めた。生活用水として給水袋を複数所持している被災者が見受けられた。給水車への補水体制が整い、給水量の制限を廃止する時期と重なったため、持ち込み容器への給水を開始し、給水袋不足の問題を解決した。ただし、ホームセンターの被災、物資の輸送体制の遅れにより、容器を購入できない被災者からの苦情もあった。長期の応急給水となった場合、給水袋が不足するため、被災初期から「給水袋の再利用依頼」を行う必要がある。

④ 隊員の体調管理

応援給水活動中は、被災者を前に休息することはできない。長期間の活動では、隊員の体調管理も重要となる。一時的に水源地と応急給水拠点を往復する補水活動と交代するなど、移動時間に休息を取らせるなどの対策も必要となる。

⑤ 指示体制の応援

被災当初、被災自治体では人員不足が発生する。熊本市では、4月19日からブロックごとに応援自治体に指揮の一部を任せたと参考となった。

⑥ 衛生管理

給水活動を急ぐあまり、手洗いなどが忘れがちとなる。給水開始前に隊員が手洗い、消毒などを忘れずに行うことが必要となる。

⑦ 給水車に付属する給水ノズルなどの改良

給水袋の不足から、ペットボトルなどへの給水を始めたが、ノズルが大きくペットボトルなどへの給水に苦勞した。大きな容器に給水する場合、手で支えきれないこともあった。応援給水活動後、これらのことを踏まえノズルなどの改良を行った。



龍田小学校校庭から溢れる給水を待つ被災者



改造した給水ノズルなど

3. おわりに

他都市応援の教訓は、本市に起きる災害等での他都市受入れの教訓になることは言うまでも無い。災害は地震に限らず、風水害もあり、被害状況も千差万別である。実践可能なマニュアルを整備することは必要だが、人材育成はさらに重要であると感じた。本市は、熊本市、南阿蘇町への応急給水活動に延べ9班、34人、熊本市、益城町への応急復旧活動に延べ6班、27人、宇城市の漏水調査活動に延べ3班、10人を派遣した。最後に、被災したにも拘らず給水活動にご協力いただいた避難所の皆様、後方支援していただいた同僚に謝意を表す。